

認知症初期異変

大きな社会問題として多くの人が知るようになった認知症。しかし、最新のデータで明らかになったのは、いまだ正しい理解が十分に広がっているとはいえない現実だった。

予防・改善の機会を逸する現状に
専門医が警鐘



家族は平均16カ月も 放置している

衝撃
データ
発覚

「80歳の母親が、お鍋を焦がしてしまふなどの失敗を頻繁に繰り返すようになり、病院で初めて認知症の検査を受けたところ、アルツハイマー型認知症」と診断されました。

じつは4〜5年前から、もの忘れは始まっていたのですが、生活に大きな支障はなかったため受診しなかったんです。医師からは、すでにかなり進行している状態だと

と言われ……。もっと早い段階で検査を受けるべきだったと後悔しています（兵庫県在住、50代主婦）

2025年には75歳以上の人口が全体の約18%を占める超高齢社会のニッポンで、深刻な社会問題となっているのが、年々増加している認知症患者の数だ。

厚生労働省の最新データによると、'40年には65歳以上の高齢者の約15%にあたる504万人が認知症になると推計されている。

そんななか、非常に注視すべき衝撃のデータが発表された。9月19日、太陽生命少子高齢社会研究

所が、1万8千110名（30代〜70代の男女）を対象に行った「認知症に関する調査」だ。

同調査によると、家族が「今思うと、あのころから認知症だったかもしれない」と思った時期から、医療機関で認知症と診断されるまでにかかった期間は、平均で16・2カ月にもなることがわかったのだ。

さらに、病院を受診させようと思ったタイミングから、実際に受診させるまでの期間は平均11・6カ月だったことも同時に明らかとなった（左ページ上段の図参照）。

「認知症かもしれないと思ってか

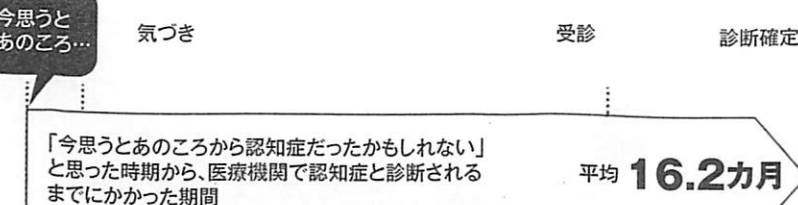
ら診断されるまでの期間が16カ月というのは、専門医の立場からすると、遅いと言わざるをえません。ですが、臨床の現場で「本人やご家族とお話をすると、診察までの期間は実際にはもっと長いケースも。5年くらい前から気づいていたということも頻繁にあります」と語るのは、日本認知症予防学会代表理事で、鳥取大学医学部の浦上克哉教授だ。

検査を受けるまでに、なぜこんなにも、放置されてしまうのか。

「健康で長生き」
最新NEWS②

太陽生命少子高齢社会研究所
「認知症に関する調査」より本誌作成

家族が異変に気づいてから、認知症と診断されるまでの平均期間



医療機関に受診させようと
思ってから、実際に受診させる
までにかかった期間 平均 11.6カ月

異変に気づいたら なるべく早く受診を

たしかに、現在までに認知症に対する根本的な治療法は確立されていない。

しかし、症状が軽度である場合は、早期に治療を施すことで発症を遅らせたり、脳機能の回復・改善が見込める可能性があることが明らかにになってきている。

「手遅れにしないためには、もの忘れや意欲の低下といった、これまではなかった日常の『変化』に気づくことがとても重要です。本人や家族が何か異変を感じたら、MCI（軽度認知障害）を疑いすぐに受診する。それが認知症予防につながります」

太陽生命少子高齢社会研究所の同調査では、MCIという言葉、そしてMCIの段階で治療すると回復の可能性があることを知らない、と答えた人は、全体の70%以上

にものぼった（下の図表参照）。認知症に対する理解は昔に比べて広がってきているものの、十分な認識には至っていない部分もあるようだ。

では、見落としてはいけない認知症の疑いには、どんな「異変」が挙げられるのだろうか。

「もの忘れが増える、怒りっぽくなる、そしてこれまでやったことのない失敗を繰り返す、などが典型的でしょう。用事を頼んだのに忘れてしまったことが頻繁にあるなどです」

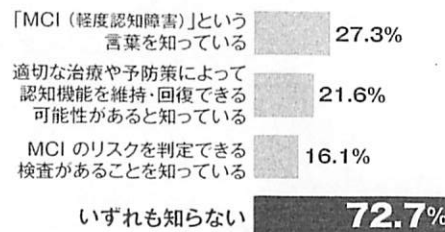
女性の場合だと、以前に比べて外出の際に化粧をすることがめっきり減る、服装に気を使わなくなる……といった変化も認知症を疑うシグナルになります」

アルツハイマー型、レビー小体型認知症の場合は、おいがわからなくなると、嗅覚機能障害もあるという。

「たとえば、料理中に鍋が焦げていても気づかない、室内に花を置いても香りに気づかないなど、においを感じにくくなったら注意したほうがいいでしょう」

だが、家族が異変をキャッチしても、患者本人が素直に病院で検査を受けてくれるとは限らない。絶対やってはいけないのは、ダイレクトな物言いで検査を強要すること。本人を怒らせてしまったら、せっかくの早期治療のチャンスを

MCI（軽度認知障害）の理解は3割に満たない



逃してしまふからだ。

家族を思っている行動がトラブルの引き金にならないためにも、よい説得方法はないのか。

「最近多いのは、夫に認知症の疑いがある場合、妻が『最近もの忘れがひどくて、認知症かもしれないから病院へ検査に行こう』と思っ

ているの。心配だから一緒に来てくれるの？」などと、自らの付き添いを頼むという方法です。

病院で妻が「せっかくだからあなたと一緒に検査をしてみよう」といった具合にアプローチすれば、波風も立ちにくいでしょう」

大切な家族に異変が見られたとき、早期治療によって改善につなげるためにも、小さな変化の「見えて見ぬふり」はくれぐれも禁物だ。

太陽生命少子高齢社会研究所「認知症に関する調査」より本誌作成